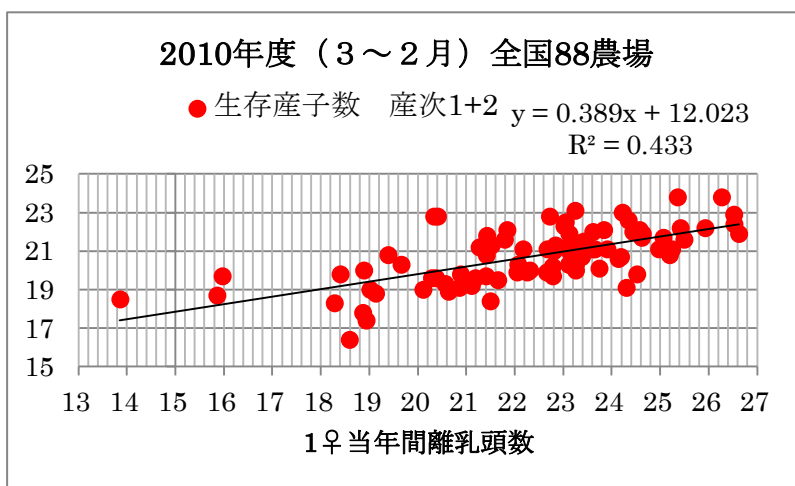


繁殖性の高い母豚群構築とPRRS対策

～リーマン学会 2011 年からの知見～

繁殖豚の中核をなす豚は？

繁殖豚の成績安定はキーポイントですが、その中でも最も肝心なのがギルト(未経産豚)の正しい管理です。初めての分娩である初産豚の管理に集中して成績が期待できる繁殖豚群の構築を目指しましょう。しかし丁寧に選抜育成より進めてきても、初産で期待通りの生産性を確保できるとは限りません。そこで仮に初産の産子数が少なくても2産で取り返す豚、あるいは初産でかなりの高産子を経験しても2産目症候群の影響を大きく受けてだめになってしまうものもあるようです。これらの豚を取りまとめて傾向を見てみると、初産+2産目の生存産子の合計が雌豚あたりの離乳頭数と相関を示すのではないかという意見があります。



昨年度集計の 88 農場の雌豚あたりの離乳頭数と初産+2産次産子数の関係

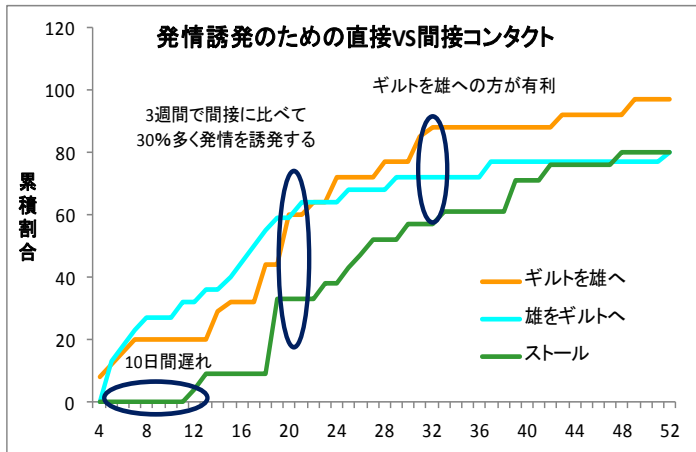
雌豚あたりの離乳頭数という指標と初産+2産次の産子数の合算はよい相関を描く

しかし繁殖成績の主体をなす3～5産の豚を支えるのは初産豚(2産)ですので、初産から2産目にかけての管理をしっかり行う必要があることはなんら変わりません。

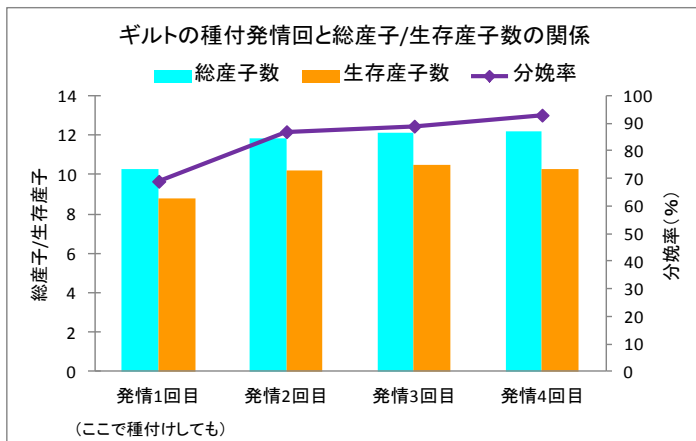
性成熟の誘導

ギルトに適切な性成熟を導くためには、雄との直接の接触が何よりです。種場に繰り上げた際に、それとなしに付近にいる雄の臭いや姿だけではどうしても十分な性成熟が得られない恐れがあります。まず開始後21日目まで発情を来させるには、雄を持ってきて直接接触させる方がよさそうです。それ以上長い経過で見ると飽きられてしまうのか、今度はギルト自身に移動ストレスをかけて雄ペンへ連れて行った方が良くもしいかなという結果となりました(次頁グラフ)。21日目までにはわずか60%しか発情していないので、繰り上げ前から雄当てが必要なことを示唆しています。つまり初回種付け予測日から逆算して、90%以上の豚が発情するように雄当てを開始を始めた方が良いのです。置き場によっては繰り上げからで十分な農場もあるでしょうから、必要な農場は検討してください。

ギルトを何回目の発情で種付けするのが良いかということも検討されています。2～4 回までは分娩率や



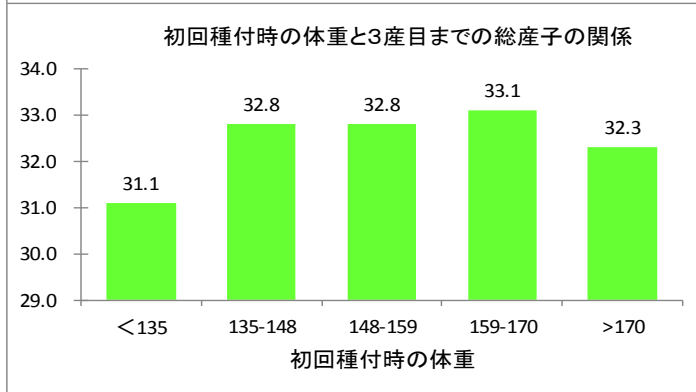
産子数に差はありません。繰り上げ時の初回発情だけは成績が若干下がるので避けたいものです。また初回種付けの体重は大きく 150kgくらいが適切なようです。データから言えることはあまり小さいうちに付けてしまうと若干産子数や分娩率も下がる傾向が見られるということです。この試験は 613 頭の豚で調査されたものですので、育種は判りませんがある傾向を示していると考えてください。



ギルトの育成

ギルトは、太らせすぎないこと(肥育豚のようにしないこと)、骨や内臓をしっかり作ることが必須です。種豚の飼料に肥育から切り替えて、見栄えはあまり良くなくても中身のある豚を作っていきましょう。

PRRS疾病対策のためにギルトを出来るだけ小さい頃から導入することが世界的に提唱されていて、今回の学会でも同じようなことが報告されています。ウイルス疾病だけでなく大腸菌などの常在疾病の安定化にも必須の管理ですので農場でどのようにして適応させていくべきことですが、特に常在疾病の動きやすい農場は再確認が必要です。



あるアメリカの大規模農場で採用されている方法を参考のために紹介してみます。

最も深刻なのがPRRS対策です。その為に

丁寧にギルトを選抜し、育成し、性成熟を誘導して種豚群に繰り入れるのですが、大規模農場ではこの辺りを慎重に考えていて、①離乳したてのギルトを別フローで育成して繰り上げたり、②ギルトの自家生産育成をして、これも同様に別フローで繰り上げることが一般的です。中には 2 産目の種付けまで別農場にしているところもありますが、これは極論として、自農場で動くウイルスや細菌にできるだけマイルドにさらして軟着陸させるのはPRRS対策の基本中の基本です。

PRRS コントロールと撲滅の比較

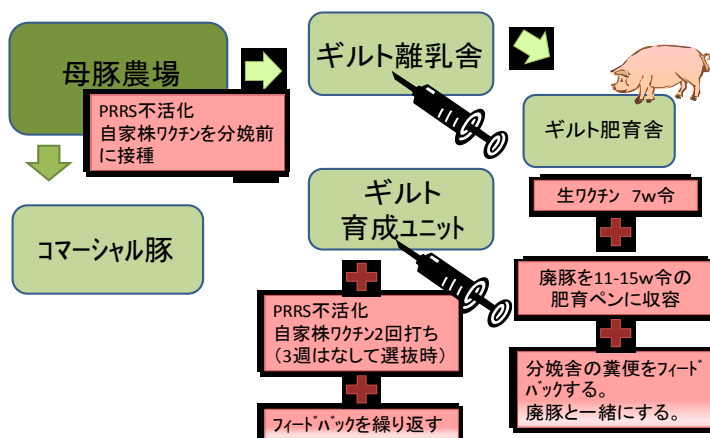
▶ コントロール

1. 母豚農場で感染が確認する
2. 農場閉鎖(4~6カ月)
3. 感染をしても排菌していないギルトを導入する
4. 子豚にウイルス感染が起っていないことをモニターする
5. 育成肥育のコントロールあるいはウイルス撲滅に移行する

▶ 撲滅

1. 母豚農場で感染を確認する
2. 農場閉鎖(4~11カ月)
3. 陰性ギルトを更新していく
4. 更新豚や生産子豚でのウイルス感染をモニターする
5. 育成肥育からのウイルスの撲滅を実施していく

ギルトは陽性農場に導入する前に
PRRSに対する十分な免疫をつける



で体験されていることですので安定した成績を期待するには絶対条件です。

したがって、ギルト離乳舎や肥育舎で現行の生ワクチンを接種し、育成中や休息中に必ず廃豚と接触させる機会を持たせる、あるいは農場のウイルスを分離してこれを接種して感染を能動的に起こさせる農場も依然としてあります。どうしたら免疫を付け、しかも排菌しないで母豚群にギルトを繰り入れるかは、いまだに完全無欠の方法はなく、それぞれの農場でいろいろと試されているのが現実です。

ただし基本的にPRRS陰性豚のギルトを導入して育成馴致を行うことは同じです。農場規模が大きいために、あるいは様々な菌株と共存している点、新たな株が突如出現する土壌などから実施されている方法です。こうした方法をすぐに取り入れて成功するほどPRRS対策は甘くないのはご承知の通りです。PRRS陰性ギルトを導入した方が良いことは、いろいろな農場

2011年11月 グローバルピッグファーム(株)